

祝！奄美群島日

令和5年（2023年）は、奄美群島が日本に復帰して70年の節目の年です。

戦後の奄美大島。あの時代に何があったのか、これからの未来を生きる子どもたちに何を伝え、残していくべきなのか。今を生きる私たち一人ひとりが考える機会になれば幸いです。

昭和16年に開戦した第二次世界大戦では、奄美群島の各地からも多くの方々が招集され、戦死を遂げています。昭和20年には奄美大島でも名瀬の街が大空襲を受け、市街地の90%余が消失する事態となりました（昭和20年4月20日）。また、昭和20年8月6日、広島に原子爆弾が投下された同じ日、赤木名が爆撃（空襲）を受け、防空壕に避難した住民の40名が犠牲となっています。

昭和20年（1945年）8月15日に戦争は終結しましたが、昭和21年2月2日、米軍政府により西諸島全域に対する軍政布告が公布されたことで、北緯30度以南の南西諸島は日本から行政分離され、奄美群島は米軍の統治下におかれま

した。これにより、日本の本土と奄美は自由な渡航が不可能となり、米軍からの配給物資や予算配当も不十分だったため、さまざまな物資が不足し、奄美の人々は困窮していました。そ

のため、北緯30度線に近い口之島や中之島を拠点とした密貿易が行われたり、島づたいに「密航」という手段を使う人々もいました。

昭和26（1951年）年1月、ダレス国務長官を団長とする対日講和使節団が来日し、日本政府との間で講和条約の交渉が始まります。

このころから日本復帰運動が全郡的な広がりを見せはじめ、奄美大島日本復帰協議会が発足し、郡島民（14歳以上）の99.8パーセントが署名したという署名活動や、合計で27回開催された集会活動、本土在住の奄美出身者たちによる陳情活動などが行われました。

昭和27年4月28日 対日講和条約（サンフランシスコ講和条約）が発効され、日本国の主権が回復しましたが、北緯29度以南の南西諸島は米軍政府の施政権下におかれた（痛恨の日）。同年8月1日、泉芳朗は高千穂神社で日本復帰を祈願した断食を5日間実施。この断食による復帰運動は、郡島民にも広がりを見せます。



昭和27年10月23日、重成鹿児島県知事が復帰関連の調査で来島し、到着の名瀬港をはじめ、奄美地方庁までの沿道は、「歓迎・重成知事」や「即時鹿児島県大島郡復活」等のプラカードを掲げた大勢の群衆で埋まりました。この歓迎の様子からも、島民がどれほど日本への復帰を望んでいたかが垣間見れます。

本復帰70周年



昭和28年8月8日、米国ダレス国務長官が「奄美群島を日本に返還する」旨の声明を発表、午後8時頃奄美の新聞社がその情報入手、号外ニュースとして各地に知れ渡ります。翌日の新聞は大きな見出しでこの「ダレス声明」を報道しました。8月9日の夜には、「ダレス声明感謝郡民大会」が名瀬小学校の校庭で開催され、1万5千人もの市民が提灯や感謝のプラカードや、のぼり旗等を持って詰めかけたとのことです。

そして、昭和28年（1953年）12月24日の夕方、日米間で奄美群島返還協定に調印が行われ、翌日の12月25日午前0時、ついに奄美群島は悲願の日本復帰を果たしました。

郡島民をはじめ、全国各地の奄美出身者達が一丸となった組織的な署名活動や、断食活動など、「非暴力」「無血」で達成した奄美群島の復帰運動は、世界的にも類例を見ない活動として高く評価されています。

2023年は、奄美群島日本復帰70周年。

この機会に奄美の歴史や当時の復帰運動について改めて見つめなおし、先人達の想いや一致団結する大切さ、そして平和の尊さを後世に語り継いでいきましょう。



【昭和28年8月9日 ダレス声明に感謝する郡民大会（名瀬小学校校庭）】

奄美群島日本復帰のあゆみ

昭和16年 (1941)	12月	第二次世界大戦（太平洋戦争）開戦
昭和19年 (1944)	6月29日	「富山丸」が米軍の攻撃を受け沈没(徳之島沖)
	8月22日	集団疎開船「対馬丸」が攻撃を受け沈没
	10月	島尾敏雄「第18震洋隊」隊長として着任
昭和20年 (1945)	4月	名瀬が空襲を受け、市街地の90%焼失
	7月	ポツダム宣言
	8月6日	赤木名の防空壕に爆撃、住民40名が犠牲に
	8月15日	戦争が終結（終戦記念日）
昭和21年 (1946)	2月2日	連合軍最高司令部GHQが日本の領域に関する指令を発表
	「二・二宣言」 (連合国覚書宣言)	
	3月13日	大島支庁内に軍政府を設置
	7月1日	名瀬市制施行（名瀬町から名瀬市となる）
	10月3日	大島支庁廃止、「臨時北部南西諸島政庁」設置
昭和23年 (1948)	6月19日	2名の教師が教育関連図書購入のために本土へ密航
昭和24年 (1949)	4月29日	配給食料3倍値上げの方針発表
	12月25日	昇曙夢「大奄美史」を刊行
昭和25年 (1950)	6月	ダレス国務長官が来日、対日講和条約の動きが出てくる
	1月11日	軍政府が食料3倍値上げを実施
	7月1日	「北部南西諸島政府」設置
	11月25日	「奄美群島政府」設置
	昭和26年 (1951)	1月
昭和27年 (1952)	2月14日	対日講和条約の交渉開始を契機に「奄美大島日本復帰協議会」が発足、泉芳朗が議長に就任、署名活動や断食運動等を行い、復帰運動は一気に高まる 講和条約の草案の第3条に「奄美と沖縄を分離する」という条項が盛り込まれていることが判明すると、「条約第3条撤廃」を求める運動も展開
	7月13日	第1回名瀬市民総決起大会（名瀬小にて）
	7月19日	第1回日本復帰郡民総決起大会（〃）
	9月9日	対日講和条約の調印
	4月28日	トカラの返還
昭和28年 (1953)	4月28日	対日講和条約（サンフランシスコ講和条約）が発効、連合国による日本国の占領統治が終了し、日本国の主権が回復 しかし、北緯29度以南の南西諸島は米軍政府の施政権におかれた
	「ダレス声明」	
	12月24日	奄美群島の日本復帰に関する日米協定が調印、奄美地方庁廃庁式
昭和29年 (1954)	12月25日	奄美群島日本復帰が実現 「日本復帰記念の日」 奄美群島返還式、大島支庁開庁式、復帰祝賀式典、提灯行列などが行われる
	1月16日	奄美大島日本復帰協議会解散式
	6月	「奄美群島復興特別措置法」制定

※過去の歴史概要については30・31ページをご覧ください。



【復帰運動の様子（高千穂神社）】



【昭和28年12月25日 奄美群島日本復帰祝賀飛行】



【復帰の喜びに沸く島民】

日本復帰記念の日のつどい

以前は毎年12月25日は泉芳朗先生を偲ぶ会が中心となって集会を開催していました。その後、日本復帰40周年（1993年）における金久中学校の演劇「潮鳴よ同胞の胸に響け」公演を機会に、同演劇公演OB会である「潮鳴会」（しゅなりかい）をはじめとして、市街地の小・中学生がこの催しに参加してきました。

そして、名瀬市市制施行50周年（1996年）を機会に、平成8年第2回名瀬市議会定例会において「日本復帰記念の

日の制定について」が議決・制定されたことにより、現在では民間と行政が一体となって12月25日のつどいを広く市民に呼びかけ、復帰運動の伝承に取り組んでいます。



日本復帰記念の日のつどいの様子（奄美市市民交流センター）



令和4年は小中学校各校における歴史教育の取組も紹介

相撲と奄美の歴史

奄美の歴史は相撲との関わりが深く、スポーツの側面と文化的な活動、双方の視点からひも解くことができます。

集落の豊年祭では一年の五穀豊穡を願い、幼児期から土俵に上がり取組が始まると、チジン（太鼓）の音とともに、ちびっ子力士の活躍に多くの集落民から声援が送られます。

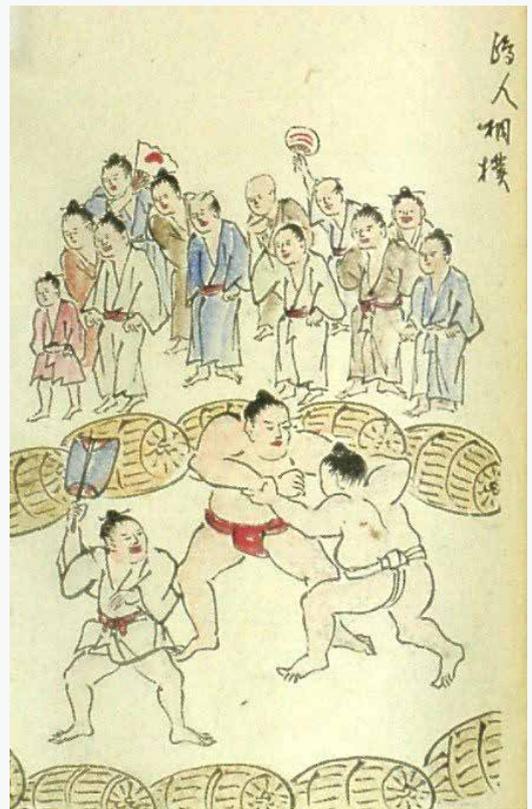
また、小・中学生やアマチュア相撲界においては、九州・全国大会に多くの選手が輩出され優勝を飾るなど、顕著な成績を収めています。

県民体育大会相撲競技においては総合優勝 19 連覇。後に一時途絶えましたが、その後 21 連覇を達成するなど、相撲大国「奄美」を広く印象付けました。

2023 年、51 年ぶりに鹿児島で開催されるごしま国体（相撲競技）が「奄美群島日本復帰 70 周年」の冠称を付して開催されることは、大きな誇りであり、多くの島民に夢と希望を与え、奄美市の発展に向けて大きな励みとなっています。



市町村対抗相撲の様子（昭和27年）



南島雑話に描かれている嶋人相撲（名越左源太 著）

～奄美における相撲の歴史と文化～

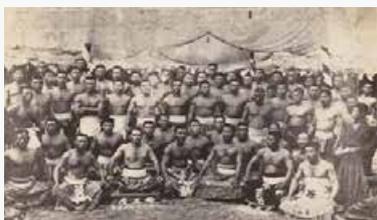
1. 江戸時代～明治

奄美の相撲は、沖縄相撲のように組み合せて始まり、相手を投げ倒すものだったと考えられています。この頃、薩摩藩や本土から影響を受けた間切(行政)相撲や集落対抗の相撲が広がっていきました。

2. 大島相撲協会の設立・「協会相撲」の始まり

明治後期から大正初期にかけて、瀬戸内町西古見で金毘羅神社奉納相撲大会、笠利町で招魂祭相撲大会が始まりました。

大正9年には、大島相撲協会が設立されました。協会相撲の始まりです。前年に、海軍相撲二段の山下辰次郎（屋鈍出身）が満期除隊して帰郷していましたが、全島相撲大会で優勝して以降、十年にわたり横綱の座を守りました。



大島相撲協会発足の記念写真

3. 戦後・行政分離期間中

昭和21年、大島郡相撲協会主催で、第1回協会相撲が行われました。昭和6年に中止されたままだった協会相撲を再興するものでした。10月6日付の南日本新聞特報で「名瀬の御殿浜を会場にして団体戦と個人戦が行われ、団体戦の優勝は古仁屋、2位宇検、3位名瀬、個人戦の優勝は鳥入氏」と報じられています。協会相撲は、昭和30年の第3回大会まで行われました。

4. 「若人の祭典」での「全郡相撲大会」へ

昭和31年、奄美大島連合青年団が下部組織強化のために各地方で開催した若人の祭典の一つの行事として全郡相撲大会を開催しました。第1回開催地は沖永良部、第2回は徳之島、第3回は瀬戸内、第4回は名瀬、第5回は笠利で開催されました。

第3回の時に、相撲関係者の座談会が開かれ、「三本勝負の制度をとっているのは奄美だけで、一本勝負に改めるべきだ」との提言を受けて、昭和33年の古仁屋場所から一本勝負に変わりました。

5. 「奄美～沖縄親善相撲大会」の開催、県民体育大会・国体への出場

昭和40年代に入り、日本相撲協会の助言のもと、奄美全郡に相撲協会を設立する動きが見られるようになり、各地域で固定化した土俵作りが普及し始めます。

昭和43年から46年にかけて、沖縄の日本復帰運動の一環で奄美～沖縄親善相撲大会が開かれました。また、昭和46年には、鹿児島県県民体育大会の相撲競技に大島チームが初出場。昭和50年に初優勝し、以後19連勝を果たし、平成9年から令和元年にかけては21連覇を達成しています。

6. 集落の豊年相撲

このように、奄美ではスポーツとしての相撲だけでなく、文化的な風習として各集落で豊年相撲が行われるなど、相撲は地域に根ざした競技として親しまれています。



住用・見里集落